2015年6月7日第一主日聖餐礼拝

説教「近づいた天の御国」

マタイの福音書4章12-17節

【夜明けの宣言】

先週は、荒野で誘惑に会われた主イエスの箇所から聴きました。そこで主イエスは、自分の力ではなく、父なる神さまの愛に実をゆだねる決断をなさった。それは、どこまでも、神さまから恵みを受ける覚悟です。父からの恵みが、たとえつらいものに見えるときも、父を信頼して、受け取ることを決断なさいました。そして、すばらしい恵みにみちたおはたらきが始まったのです。

マタイは、イザヤ書(9章)を引用します。「暗やみの中にすわっていた民は偉大な光を見、死の地と死の陰にすわっていた人々に、光が上った」(マタイ4:16)。暗い夜が終わって、光が上ると夜明けが来ます。そのように、夜明けが来た、もう夜ではない、と宣言されているのです。それはほんとうに起こったできごとです。

【光の中で】

よくご存じの星野富弘さんも、光が上っていることに気づいたひとり。そのとき、悲しみや苦しみによって、自分の人生はだめにされてしまった、と思っていた考えが変わりました。光の中で見ると、その痛みにも神さまは愛を注いでくださっていて、そこからよきものを取り出してくださっていることに気づいたのでした。こんな詩があります。

冬があり夏があり
昼と夜があり

晴れた日と
雨の日があって

ひとつの花が咲くように
悲しみも苦しみもあって
私が私になってゆく

私たちは修行が好きで、自分の信仰をきたえ、たくましくしようと、自分の内側をのぞき込みやすいところがあります。そして、「ああ、自分はまだまだ」と言い、あるいは、ほかの人と自分を比べて、「あの人の信仰はすごい。でも私はだめだ」と言います。けれども、信仰とは、神が人となってこの世界に来られ、すでに光が上ったという事実を受け入れることです。ただ、受け入れることなのです。受け入れることが難しいとしたら、それは福音があまりにすばらしすぎるからなのです。

暗黒のガリラヤから、上った光とは主イエスのこと。神さまは、イザヤの預言のとおりに主イエスを遣わしてくださいました。私たちに希望を与え、そして与えた希望を実現させてくださる。それが神さまというお方。私たちを大切にしてくださる神さまは、私たちを暗やみの中にほっておかれません。

【天の御国は近づいた】

「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」(17)。これが、主イエスの第一声。「天の御国」というのは、他の福音書では、「神の国」という言葉が使われていることば。死んでから行く「天国」ではなく、今、すでに始まっている恵みに満ちた神さまの支配です。主イエスがこの世界に来てくださって、神さまの恵みに満ちた支配が新しく始まりました。もちろん、今までも神さまは世界を支配しておられたのですけれども、さらに豊かな恵みが始まったのです。それは、主イエスを受け入れる者たちが、暗やみの中から立ち上がらせる、そして、主イエスとともに光の中を歩み始めさせる支配です。「悔い改め」とは、神さまの恵みの支配のもとで生きることを選び取ることです。

主イエスを信じない人は、雨戸を開けない人に似ています。暗い夜が終わって、すばらしい一日が始まっていることに気がつかないでいる人を、主はとても残念に思われます。だから、夜明けを知らせ、ご自分といっしょに光を喜ぼうと喜びの声で招いてくださるのです。

【光の中を】

人は神のかたちに似せて作られました。人のどこが神さまに似ているか。それは、愛。自分を注ぎ出す愛です。神さまのかたちを失ってしまった人ですが、光の中を歩く者たちに、神さまはご自分の形を、回復させてくださいます。

ひとりの人の愛が回復されるとき、まわりの世界も変えられて行きます。私たちが光の中を歩くなら、私たちは、まわりの人々を愛し、受け入れ、赦します。そうして癒された人々が、また同じように愛し始めるからです。光の中で愛し合う互いを喜びつつ、ごいっしょに主の聖餐にあずかりましょう。